

高島洋

高島 洋 一九一六年神戸に生まれる。詩誌『コスモス』の一九六六年十二月号の「同人素描」によれば彼の略歴は「昭和11年12月・朝鮮竜山騎兵28連隊現役入隊。同21年3月・佐世保へ復員、大丸百貨店に勤務。同22年2月・神戸の詩誌『クラルテ』同人。同22年8月・クラルテ同人前田美代子と結婚、同23年8月・イオム同盟に参加。○現在「コスモス」の他尼ヶ崎詩人会同人、労働運動紙『労働と解放』編集。日本アナキスト連盟員（C・Aの会所属）」となっているが、ここには高島が百貨店の監視員というイヤな仕事を止めて神戸製鋼の鉄鋼労働者となり、労組の役員となり、さらに鉄鋼労連の中央委員として滞京一年、ということを書いている。高島はこの職場を定年でやめるまでの経験によって、現代の大工場とそこで働く労働者のプラス・マイナスを实直な詩風によって捉え、そのことがこのアンソロジーの中でも際立つ存在となっている。一九七二年に『高島洋詩集』が刊行された。

悪 夢

隣室からしぼりだすような妻のうめき声がきこえてくる。

それをしかりつけるような産婆の声のしかぶさった。

うめき声は弱くなり又高くなりながら、まわりからじりじりと、わたしをしめつけてくるようだった。

もういくらなくっても男はかすかにうめくだけだった。

縄をほどくとわたしは、そいつを古井戸のそばへひきずっていった。

よろよろと男は立上りながら、一しゅん気付くと大声でさげび全身

でわたしにしがみついていた。

ありったけの力で、男は手足にとりすがりながらけもののようにわ

めいた。

瞬間、男のくぼんだ眼がみるみる拡大して、わたしを見つめた。

からみついた最後の指をふりもぐと、そのままうわぁっとのけぞり、
かん高い叫び声が、ふかい井戸底へとおちこんでいった。
男がのこしたさけび声が、くらい夜空にこだまして、遠く近くわた
しをとりまいて吠えつつけていた。

それは夜更けに着いた山奥の小さな部落でのことだった。
わずかな休憩時間に、みんなは狼のように走りまわった。
農家の納屋をのぞくと、ちらりと影がうごいた。

女だ。

からだ中があつくなり、胸苦しいまでに呼吸が早くなっていた。
一歩ふみだすと、女は狂気のように声をあげた。

おどしのつもりで短剣をぬくと、ぐうっと女の前につきつけた。
と、その時、女も逃げようとおもわず立上ってきた。

ぎゃっ、とさけぶと、切先が女のむねにつきささっていた。

よろけながら女は両手で刃先にとりすがったが、ひきぬくとばった

りたおれ、みるみる血が着物をとおしてふきだしてきた。

女はうめき声をあげながら、納屋のすみにつきあげた粟穀の方へと
にじりよっていった。

最後の力をふりしぼって粟穀をかきわけていた。

見ればその中から嬰兒が半分あらわれながら、とつぜん声をあげて
泣きだした。

わたしは夢中でその場をのがれた。

火のついたようなその泣き声が、わたしのうしろ姿を追いかけてき
て、いつまでもいつまでもきこえていた。

びっしょりと汗ばみ、ふとんととりすがって、わたしはおもわず声
をあげた。

あたりはまっくらな闇の底のようで、その奥底から、歯をくいしば
る妻のいきみ声がきこえ、けわしい産婆の聲がたえずおおいかぶ
さってきた。

その間断をぬって、井戸底へなげこんだ男の絶叫がせつなげにひびき、血みどろのうめき声や、嬰兒の泣き声が入りまじった。いまはもう果しらぬ谷底へ、くらくらととめどなくひとりおちこんでゆくわたしだった。

恐怖と戦場

霧であろうか。

砲煙であろうか。

うすぐらい気流のなかで、

彼我の銃撃は、はげしく火を吹いた。

しばらく銃声が途絶えると、

いつしか接近していた敵兵が、

突然、おもわぬ方向から、黒ぐろと現われ間近に迫ってきた。

わたしは、おどろきのあまり逃げようとしたが、

足が動かないのだ。

こんなはずはない。

焦燥のうちに、

濃紺の服をきた敵兵が追いついてきて、

わたしは捕えられた。

その、しゅん間

わたしは目ざめたのだ。

ほっとしながらも、

時々、おなじ夢に襲われることをいぶかった。

戦後二十五年、いまだに。

パビリオンの立ちならぶ、ここは万国博の会場。

いま広場では、ファンファーレ、祝砲、紙吹雪。

インターナショナルなよそおいにもえたっていた。

黒、黄、白の人種の枠を超えて、

手と手をつなぎ、

音楽に合わせて、いつまでもおどりつづけていた。

しかし、おどっている彼らの足は地面についていたか。

たとえば、彼らが自国にかえり、

それぞれの支配者から戦場へひきずり出されたとき。

銃を放棄することができるか。

やむなく銃をとり、

木枯しふく戦場で、

敵兵を射殺したとき、

その息絶えた敵兵の顔をよく見れば、

エキスポで手をつないでおどった、相手の顔ではなかったか。

彼我が対峙し、

遙かな村落で敵兵が黒点のように移動するのが見え、

ただだっ、ただだっ、

銃撃を合図にさっと緊張が走るとき、

わたしは恐怖におびえた。

殺すか。殺されるか。

おそらく敵兵も、おなじ心境であつたらうか。

そのとき愛はみじんにくだけるが、

だからといって敵に対するにくしみもない。

ただ自分を守るだけ

そして、やむなく命令に服従する。

その時、人は銃の部分品に変化するのだ。

だが、どちらを向いて引金ひくか、

そいつはわからない。

路傍のベトナム

…サンドイッチマン…

ビエロの化粧を濃ゆくぬり

キャバレーの広告を高くかかげ

わたしは歩く。

わたしはしがなないサンドイッチマン。

面映ゆい気持はとっくに捨て、

あわれみやさげすみの視線も眼中にない。

道化者らしく、

悪びれずに歩こう。

けれど心の片すみに、

やはり、しこりのように残っていたおどおどした気おくれ。

ああビエロの化粧をなぜ濃ゆくぬる。

今日はキャバレーの広告をかなぐり捨てて。

ベトナム反戦のゼッケンを胸と背に、

ひとり神戸元町の雑踏のなかを歩く。

むろん化粧などしていない。

行き交う人々、ショーウィンドをのぞく人々が、一せいにわたしの

顔を見る。

なかには歩いているわたしを追い越して、

わざわざ顔をのぞきこむ奴もいる。

素面をさらして歩きながら、

だが、わたしの心はすばらしく落ち着いていて、

やがて師走の、

もり上る群衆のなかへと入ってゆく。

いのしし

せまい四角な鉄オリのなかで

ひくく、おさえるようなり声をおげ

二頭のいのししがじゃれあつては、いきおいよくかけまわっていた。

ぐるぐるかけまわるたび、壁や鉄格子につきあたりそうで、つきあ

たらなかった。

堅いセメントのぬれた床にすべりそうで、すべらなかつた。

だんだんうなり声が高くなり、

かけまわる足が早くなつても、やはり毛なみさえ壁にふれず、すべ

りもしなかつた。

こいつは、いつごろからこのせまいオリのなかに入れられているの
だろうか。

つかれると二頭のいのししはすみっこ石かげにうすくまり、仲よくもたれあったままねむるのだった。

工場にて

人べらして、

いよいよ仕事が重くなる。

エンピツは、一ヶ月にひとり一本。

お茶は、一ヶ月にひとり五〇グラム。

みみっちい計算がすめば、

もっとみみっちい節約はないかとさがしまわる。

ある日、どこからか

怒った風がやってきた。

ごうごうと逆まき、荒れる、すさまじさ。

建設して二年もたたぬ工場の、

トタン屋根がガタガタふるえ、悲鳴をあげる。

ついに大きな口を開けた。

吹きこむ雨風。

操業不能。

蜘蛛の子のように神妙に、右往左往する

おれたち労働者。

それでもみみっちい計算はつづく。

いっそのこと、

太平洋のどまん中で、

あれ狂う風雨を霧散させるような、

大きな科学的計算は成り立たぬものか。

みどりの工場

工場のなかでは砲弾がつくられていた。

だから、

建物はモダンで、みどりのベンキが八月の陽に光っていた。

工場のなかでは砲弾がつくられていた。

だから、

いたるところに、みどりの木々が植えられ「善意の園」と名づけられていた。

工場のなかでは砲弾がつくられていた。

だから、

いたるところに、みどりの安全マークと「安全操業は世界の願い」

というスローガンがかかげられていた。

さまざまなみどりにおおわれていても、

工場裏の運河からは、砲弾がつきつきに出荷されていた。

この工場でつくられた砲弾が、いつかこの工場におちてきて、建物

や木々をふっとばしてしまいかもしれない。

ここで働く若者たちが、

それに気付かぬはずはない。

しかし、いま、

生きてゆくためには、

生きてゆくためにはと、

眼さきのせまい視野で、割切ってしまうのだろうか。

休憩時間に、

みどりの木々をくぐって出てくる彼らの顔は、

意外に明るかった。

けらけら、けらけら笑い合って出てくるのだった。

庄延工と赤い鼻緒の下駄

わたしがM製鋼所に入社したのは、昭和二十三年の秋。

そのころ庄延工場に行くと、若い仲間たちが

赤い鼻緒の、女ものの小さい下駄をつっかけ

ごうごうとなる庄延機に向って、作業しているのを見かけた。

何故、女ものの下駄をはいて作業しているのか。

ひとりには軽いからだと言い

ひとりには鉄床の上で、すべらないとも言ったが

そのあと二人は笑いながら魔よけたとも言った。

赤い鼻緒ににじむ

びったり体によりそった妻や恋人の愛情。

それが作業のあぶなさから守ってくれるという。

むろん、そのような思考はあやしげなものだ。

だが、灰色にくすぶる工場の中では
赤い鼻緒の色が鮮かで

それをつっかけて作業する姿に、妙に情緒的なものがあった。
それにしても、わたしたちのまっすい青春の表現ではなかったか。
そこには機械のかたわらに、わずかに人間の息吹きがあった。
それから十年。わたしはその青春を組織することができなかった。
いま現場には赤い鼻緒など見当らぬ。

みんな兵隊のように、そろいのヘルメットをかむり、
爪先鋼板入りの、そろいの安全靴をはいている。
それでも災害件数は上昇していくのだ。

ヘルメットの下で、じっと耐えているのはわたしたちの不信の眼。
そこには青春がない、人間がない。

就業時間、わたしたちの内部は灰色に仮死している。
やがて青空に鳴りわたるサイレンの音。
それはわたしたちの蘇生の合図だ。

午後五時。

だから見給え、工場を出ていく仲間たちを
単車や自転車で

赤い鼻緒の世界へ、まっしぐら
すさまじい勢いで、かえっていくのを。

ストップウォッチ

工大出の技師だという小柄で背のびしてあるく男。
一見、柔和そうに見えるやつ。

おとこは今、ストップウォッチをもって
おれたちの作業動作を

刻み

計っては

すばやくペンでグラフに記入している。

厚さ 一・六ミリ

巾 三八五ミリ

長さ 二〇〇〇ミリ

の酸洗鋼板一〇〇枚を

塗油機にかける時間はどのくらいか。

防錆油は何リッター使用するか。

帯鉄でまいて結束するのに何分かかかるか。

ワイヤーロープをとおして

クレーンをまつ時間は。

そうだ。

クレーン待ちの時間が長いからと

十分間の休憩を削りとられたのが

つい先日のことだ。

鋼板をロールにかませながら

おれは時計の刻む音をかすかに聞いた。

かすかに、いやたしかに、聞える

コチコチ コチコチ

適確に、つき刺すように

コチコチ コチコチ

時計に刻まれているのはおれの全身だ。

おれは荒々しく

鋼板をひっぱり ロールに突っこむ

一しゅん

がつん がらがらがら

鋼板はコースをすべって

ななめにひっかかる。

故障。

おれは叫ぶとがちんとスイッチを切った。

沖 縄

沖縄スクラップを満載した艇が、

錆色におおわれて

ゆっくり岸壁に横づけした。

夜を徹しての荷上作業がつづいている。

移動クレーンが、にぶいうなりを発するたびに。

スクラップはフックにかけられて、

電光をぎらぎらはねかえしながら、地上にはこぼれる。

汗と油と泥と鉄錆に、ぐっしよりまみれ、

夜露のしみる暗い電光の下。

あかぐろい屑鉄と見わけもつかぬおれたちは、

うごめくように、おなじ動作をくりかえしていた。

やがて、徐々に明けゆく船底で、
最後に残った土砂のなから、
こまかくくだけている白いもの。
おれたちは何んども見つめるうちに、おもわずぎよっとした。

まぎれもない人間の白骨。

土砂なみに計量し、

どすぐろい運河のよどみのなかに、容赦なくすて去ろうとする、

検収係の合図を押し、

おれたちは、せめて地上に埋めて、

さむざむと葬る。

機械を見る目

窓から朝日がさして

ピカピカ光る機械にむかって

Aの奴は毎朝、お早ようと声をかけるんだ

正月には、しめ縄、祝餅で機械をかざっていた

それを工場長が聞きつけて

これこそ模範社員とほめちぎり

今日の部課長会議で

近く表彰することに決定されたんだ

だがね おれはどうもなっとくできない

よもや忘れてはいまい

Bがぶんぶん廻転するロールに腕をまきこまれ、あつという間に、
のしいかのように平べったくなった腕をたれたまま、ボロのよう

に倒れたときの、あの土色の顔を

またCが鉄板を剪断するシャーで指を切り落され、奇声を発すると床に落ちたじぶんの指先をひろって、気が狂ったように医務室にかけこんだときのことを

Aの奴は、じぶん達が、毎日機械にふりまわされていることを自覚しているだろうか

その点、先日Dの奴とも話し合ったんだが奴はちがうんだ

まず機械に対し奴は距離をおいている

Bの腕のことやCの指のことも忘れてはいない

奴も機械をよく手入れして

ピカピカ光らせているけれど

機械を愛するといった感傷ではないというんだ

機械に使われるんじゃないって

機械を使わなくてはいけないと言うんだ

おれはDの方がいかしていると思うんだが
どう思うかね 君